
モーニングセミナー(抄録)

気道(呼吸器)感染症に対する抗菌薬の適正使用 —ニューキノロン薬を中心に—

青木 信樹

信楽園病院内科

抗菌薬の投与経路は感染症の重症度および宿主病態によるが、一般的には外来治療が可能ならば経口薬が選択される。しかし、経口薬には薬剤により吸収の差があるため、呼吸器感染症に対しては、肺炎球菌、インフルエンザ菌、マイコプラズマなどの主要な原因微生物に対する抗菌力は勿論、吸収が良好で気道への移行性が優れたものを選択することが望まれる。

近年、本邦においても抗菌薬の用法・用量は従来の慣習的決定から、経口薬、静注薬に限らず、PK/PDを考慮し決定されるようになりつつある。

市中呼吸器感染症においては、多剤耐性肺炎球菌、BLNAR インフルエンザ菌、マクロライド耐性マイコプラズマなどが増加し、大きな問題となっており、経口セフェム系薬、およびマクロライド系薬の繁用が一つの要因として挙げられる。また、ここどころ、新規抗菌薬はほとんど開発されていないことから、現在ある抗菌薬の適正使用が極めて重要となってきた。従って、耐性菌感染症に対する有効な対応、耐性菌出現を誘導させない治療を行っていくには、PK/PD理論の考慮が求められ、様々な感染症に対するガイドラインが作成されてきている。

本セミナーでは経口抗菌薬、特にキノロン系薬を中心に、呼吸器感染症に対する抗菌薬の適正使用について述べさせていただいた。